

国語

語句・文法
内容理解
文脈把握

1 次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えよ。

① フランスの経済学者フーラスティエは、近い将来における人間の一生を計算して、おどろくべき結論に達した。彼によると、十年後のフランス人のばあい、「仕事」という必要やむをえない「時間」の支出は、合計四万時間にすぎない、というのである。これを、人生の「総時間」と対比してみるとおもしろい。私の計算では、人生は六十六万時間である。睡眠時間にその三分の一をとると、残りは四十四万時間に近い。そのうち、「仕事」はわずか四万時間。人生の1割にすぎないではないか。

② その残りの九割、すなわち四十万時間の自由時間、それを私たちは、通常レジャーあるいは余暇ということばで呼ぶ。〈ア〉世間では、このことばについて誤解することが多く、レジャーといえば遊びのことだ、と考えている人が少なくないが、正しくいえば、レジャーとは自由に使うことのできる時間のことだ。別に遊ばなくたってよろしいのである。何でも好きなことをしたら、それでよい。それは私的な時間である、といってもよい。誰にも制約されず、干渉されず、勝手に使える時間なのである。〈イ〉それを私たちは、十万時間という単位で持っているのだ。

③ いわゆるレジャーを考えるにあたって、大事な点だと私は思う。レジャーは個人の自由時間である。自由というのは、まさしく自由ということなのであって、誰からも指図されるものであってはならない。〈ウ〉要は、自分の人生が、自分にとつてもっとも満足のゆくようなものであるように、自分自身で時間の使い方を設計することである。それは、厳密な意味でのプライバシーに属することである、ということもできよう。自分の時間は自分のものであり、その使い方も自分で作ればよいのである。〈エ〉

④ そう考えると、私たちは、ひとつ反省をしなければならないように思われる。と、いうのは、現在のいわゆる「レジャー」なるものが、おおむね皮相的であり、うつろいやすいものであるからだ。スキーが流行すれば、誰もがスキー熱に浮かされる。ゴルフといえば、みんながゴルフに熱中する。そういう流行にまきこまれることがすなわち「レジャー」だ、と思いきんでいる人が、あまりにも多いのではないかと私は思う。テニスが好きならそれよろしい。文学が好きなら、それもよからう。しかし、わずか二年、三年という短い期間の流行におつきあいすること、かけが

えのない人生との間には、あんまり関係がない。文学が好きなら、一生がかりで書物を読み、文学の喜びを味わいつくすには人生はあまりに短い、ということを知るのが、レジャーというものだろう。レジャーとは、それぞれの人が、自分の人生の意味を追求し続ける行為のことなのである。それ以外のものではない。世間でいわれる「レジャー」なるものは、真正なるレジャーとは何の関係もないのだ。友人に聞いた話だが、ノミの収集に人生をかけている人が、イギリスにいるそうだ。あらゆる動物につく、あらゆる種類のノミを熱心に集めるのである。人から見たらおかしいかもしれないが、本人にとってはその行為に生の情熱のすべてが投入されているわけだし、そのことで人生が充実しているのだから、それでよいのである。

⑤ このことは、特に人生の第三期、**D** 従来の用語を使えば「老後」に対する準備として考える時、決定的な重要性を持つ。人生の第一期（生まれてから学校終了まで）、第二期（就職から退職まで）は、からだも元氣だし、何かと気のまぎれることもあるから、時間つぶしにこと欠かない。ワイワイとさわいでいるうちに、どうにか時間はたつてゆく。しかし、第三期は違う。そこでは、人間は完全に自由で、**E** 孤独な時間を「使う技術」を持つていなければ、退屈でしかたがないのだ。その第三期にそなえて、お金の準備をするということは、多くの人が考えている。しかし、それと同じくらい、あるいはそれ以上に大事なのは、「時間」の使い方の準備なのではないだろうか、と私は考える。現在、人生の第一期を生きている若者たちが、数十年先の第三期のことを考えるというのは、いささか滑稽なことに聞こえる。けれども、それは、自分が一生つきあつてゆける何ものかを探求する、ということなのだ。人生の設計を早いうちにはじめておくことは、けつして無意味なことではない。

(加藤秀俊「日常性の社会学」による)

(1) 文章中の **A** 別の品詞名を漢字で書け。

(2) 文章中の **B** 反省と熟語の構成が同じものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 人為 イ 孤独 ウ 予約 エ 帰国

(3) 文章中に 現在のいわゆる「レジャー」なるものが、おおむね皮相的であり、うつろいやすいものである とあるが、筆者は「レジャー」とは本来どのようなものかと言っているか。[4]段落中のことばを用いて「…もの。」に続くように、二十文字以上、二十五文字以内(句読点も字数に数える)で書け。

(4) 文章中の [D]・[E] に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア DⅡただし EⅡしかし I DⅡだから EⅡさらに
ウ DⅡつまり EⅡしかも EⅡけれども EⅡあるいは

(5) 文章中に 人生の設計を…無意味なことではない とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 人生の第三期になった時の気のまぎらわし方を、お金の準備をしながら考えておく必要があるから。
イ 人生の「総時間」における自由時間の使い方を、自分の満足のゆくように作り上げる必要があるから。
ウ 人生の九割にもほる膨大な余暇を楽しむために、一生つきあえるような友人を作る必要があるから。
エ 人生の第三期という孤独で退屈な時期のために、常に流行を追って気をまぎらす必要があるから。

(6) この文章には、次の [] 内の一文が抜けている。この一文はどこに入るか。最も適当な位置を文章中の(ア)～(エ)のうちから一つ選び、その記号を書け。

レジャーはこんなふうに使いなさい、などという、一見、親切じみた助言には、あんまりおつきあいたくない方がよい。

(7) この文章の内容に合っているものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 自由時間における楽しみがある生活とそうでない生活を比べながら、人間の本質までも考察している。

内容理解

語句

文法

2

次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

イ 余暇の時間の人生に占める割合から説き起こして、現代の「レジャー」産業のあり方を批判している。

ウ 個人と社会の関係のあり方を中心にしながら、最も有効な人生の過ごし方を提言している。

エ 「レジャー」や余暇に対する考察をくり広げながら、人生の全般の過ごし方にまで言い及んでいる。

母は孝次の肩から学校かばんを脱がせると、その替わりにざるを孝次の手に持たせた。

孝次は返事をしないで、もじもじして暫くそこに立っていた。
「ぐずぐずしていねえで、早く行くこつちや」

と母はまた言った。孝次は諾々と憤ったように言ったが、まだ暫くそこに立っていた。土間の暗さに慣れた孝次の眼には、その時、セルの着物にメリンスの兵古帯をしめた八、九歳の大人しい少女の姿が映っていた。そしてその少女の、顔の割にひどく大きい眼が孝次を見上げた時、孝次は堪らない気恥ずかしさに襲われた。なぜか、この少女と並んで裏山のみかん畑へ登って行くことは自分には難しい仕事のような気がした。(a)

「行くべえや。おれももいでやらあ」
その時孝次と一緒に学校から退けて来て、まだそこに居た兵太郎が背後から声をかけた。

兵太郎のその言葉で孝次は、
「ざるへいっぱいもぐんかい」

と母親の方へ声をかけ、幾子の方は見向きもしないで土間を飛び出した。
孝次は兵太郎と並んで丘陵の斜面を登って行った。一度も背後を振り向かなかつた。しかし地面をたたく小さい草履の音が、直ぐ自分の背後で聞こえているのを、彼は両の耳を大きくして聞いていた。(b)

みかん畑は、入江に面した丘陵の斜面を覆って見はるかすように拡がっていた。孝次の家のみかん畑は丘陵の背に近いところであって、その場所柄のためか、村の沢山のみかん畑の中でも毎年色づくのが一番早いので知られていた。

孝次と兵太郎は、同じ一本のみかんの木によじ登った。そして黄色く熟れた果実をはさみで切った。ちよきんとはさみの音がするとみかんは木から離れ地面に落ちた。

孝次にとって、はじめは **a** と思われたみかんの収穫だったが、しだいに **b** に変わっていった。

(8) この文章全体を三つの場面に分けるとすると、二つめの場面はどこからどこまでか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア **a** のあとから **b** まで。 イ **b** のあとから **c** まで。
ウ **c** のあとから **d** まで。 エ **b** のあとから **d** まで。

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

ある河のほとりを、馬に乗りて通る人ありけり。そのかたはらに、龍といふもの、水に離れて迷惑するありけり。この龍、今の人を見て申しけるは、「われ今、水に離れてせんかたなし。あはれみをたれたまひ、その馬に乗せて水ある所へ着けさせたまはば、その返報として金銭を奉らん。」といふ。かの人、**A**、馬に乗せて水上へ送る。ここにて、「約束の金銭をくれよ。」といへば、龍、怒つていはく、「なんの金銭をか参らすべき。われを馬にくくり付けて痛めたまふだにあるに、金銭とは何事ぞ。」といどみ争ふところに、狐馳せ来たりて、「さても、龍殿は、何事を争ひたまふぞ。」といふに、龍、右のおもむきをなんいひければ、狐申しけるは、「われこの公事を決すべし。さきにくくり付けたるやうは、なにかしつるぞ。」といふに、龍申しけるは、「かくのごとし。」とて、また馬に乗るほどに、狐、人に申しけるは、「いかほどか締め付けらるるぞ。」といふほどに、「これほど。」とて締めければ、龍のいはく、「いまだそのくらゐなし。したたかに締められける。」といへば、「これほどか。」とて、いやましに締め付けて、人に申しけるは、「かかる無理無法なるいたづら者をば、もとの所へやれ。」とて、追つたてたり。人、げにもとよるこびて、もとの畠におるせり。その時、龍いくたび悔やめども、甲斐なくしてうせにけり。

F

(「伊曾保物語」による)

- (注1) 迷惑するありけり＝困っていた。(注2) せんかたなし＝どうしようもない。
(注3) 返報＝見返り。(注4) 公事＝訴えごと。
(注5) なにかしつるぞ＝どのようにしたのか。
(注6) いまだそのくらゐなし＝まだその程度ではない。(注7) げにも＝なるほど。

(1) 文章中の **A** に入ることはとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。
ア 嘘と見破りて イ 誠と心得て
ウ 情に流されて エ 意に反して

(2) 文章中に 右のおもむき とあるが、その具体的な内容が述べられている部分を三十字以内(句読点も字数に数える)で探し、はじめと終わりの三字を抜き出して書け。

(3) 文章中に われ、この公事を決すべし とあるが、狐はどうしてこのように言ったのか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 龍にうまくとりいつて、さらに人を困らせてやろうと思ったから。
イ 人が龍の弱みにつけ込むのを見かね、助けてやろうと思ったから。
ウ 人と龍のけんかを仲裁して、謝礼をせしめてやろうと思ったから。
エ 龍のような自分勝手なならず者を懲らしめてやろうと思ったから。

(4) 文章中の 乗るほどに、いやましに締め付けて の動作主の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア D＝狐、E＝人 イ D＝人、E＝馬
ウ D＝龍、E＝狐 エ D＝龍、E＝馬

(5) 文章中の **F** に入る教訓として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア そのごとく、善人、悪人とは、悪人の仲間が多し、なれども善人の味方は少なし。それゆゑ、善人といへども、その理を曲げて屈すといふこと、世に多かりける。
イ そのごとく、人の恩をかうむりて、その恩を報ぜんのみ、かへつて人に仇をなせば、天罰たちまちあたるものなり。
ウ そのごとく、一度、人を懲らす人は、いつも「悪人ぞ」と、人、これを疎んず。ただ、人は愚かにして、他人に抜かれたるにしくはなし。構ひて、末の世に、人を抜かんと思はじ。
エ そのごとく、重欲心の輩は、他の財をうらやみ、事にふれて貪るほどに、たちまち天罰をかうむる。わが持つところの財をも失ふことありけり。